

## 【前置き】

左の文章は、姫君を入内させることになった大臣が、興入れの調度を準備する中で、最も大切な大臣家伝来の宝物の硯を錦の袋に入れて、厨子（扉が両開きの収納箱）に納めた直後の場面です。これを読んで、後の問いに答えなさい。

## 【本文】

しかる間、その家に生良家子の年若きが見目きたなげなきありけり。大臣、これを「近きあたりの清めなどせよ」とありければ、朝ごとに清めしける程に、この男生手書く者にて、この①(御厨子なる)硯の極めて見まほしく覚えけるに、大臣は内におはす程にて、上は我が方に渡りて姫君の衣どもの事いひおきつとて、姫君とともにおはす。女房どもも或はその供にあり、或はおのおの出で立ち急ぐとて、局局に居たり。②(かく人なき隙に)この清めする男思はく、「ただ今ひそかに開きてこの硯を見たらむに誰かは知らむ」と思ひて、硯の筥の下ア(なる)鍵を取りて厨子を開きて、この硯を取り出だして見るに、まことにa(伝へ聞きつる)よりもいはむ方なく微妙なれば、愛して、手の裏に据ゑて差し上げ差し下ろし、しばらく見る程に、人の足音のすれば、急ぎて置かむとする程に、取りはづして打ち落とす。中より打ち破りつ。この男まことにあさましく物も覚え、護法の付きたる者の様に震ひて、目も暗れ心も騒ぎて、目より涙を流して泣く事限りなし。「大臣これを見て、いかイ(なる)事を宣はむずらむ、我が身はいかがならむずらむ」と思ひけむに、まことにいかばかりかはわびしく悲しく覚えけむ。

しかるに、この足音しつる人はこの殿の若君ウ(なり)けり。その若君、形美麗にして心に慈悲ありけり。年は十三なりけり。今は元服もあるべきに、御髻のいつくしきを惜しみて、今まで元服はなきにぞありける。少年なれども、身の才も賢かりけり。しかるに、この男の、この硯を打ち破りて、物も覚えずして惚れまどひて死にたる者の様にて居たるを見て、若君あさましと思ひて、「こはいかにしたる事ぞ」と問へば、この男泣きて答へもせず。若君極めてこれをいとほしと思ひて、この硯の破れを取りて本のごとく厨子に納めて錠を差しつ。その後、この男にいはく、「汝あながちに嘆く事なかれ。「若君の、この硯を取り出でて見給ひつる程に、打ち破り給ひつ」とぞb(いへ)」と教へつ。③(男これを聞くに、いかばかり覚えけむ、まことにうれしくかたじけなく覚えて)、這ふ這ふ立ちて去りぬ。

しかれども極めてかははゆく覚えて、この事を人にいはずしてc(毫けゆく)程に、大臣、内より出で給ひて、「物ども取り出ださむ」とて、厨子を開きて見給ふに、この硯、袋より取り出だされて、いとうはしく中より破れたり。これを見るに目も暗れて、あさましく物も覚え給はず。しばらく思ひ静めて女房に問ひ給ふに、知らぬ由を申す。「例の御清め参りつる程なり」と申せば、この男を召して、「この硯の破れたるはいかなる事ぞ。汝は知りてやある」と問ひ給へば、男、顔の色も草の葉の様にエ(なり)て、袖を打ち合はせてうつぶして候ふ。大臣極めて腹悪しき人にて、目をいかからかして、「尊、たしかに申せ申せ」と責めらるれば、男、震ふ震ふ息の下に、「若君の御前の」とばかり二声ばかり申すを、大臣、「など、いかに」と声を高くして責めらるれば、「取り出だして御覧じつる程に、取りはづして打ち破らせ給ひたるになむ」と申せば、④(大臣ともかくも宣はずして、男を「早う立ちね立ちね」と宣へば)、男這ふ這ふ立ちて去りぬ。

大臣、内に入りて上に宣はく、「この硯は児の打ち破りたるにこそありけれ。この子は子にはあらで、前世の敵なりけり。かかる非常の者を我が年来愛しくして養ひける事」とて、声を放ち泣き給ふ。上これを聞きて泣き給ふ。女房どもも忌ま忌ましきまで泣き合ひたり。若君の乳母はたいふべき様なし。しばしばかりありて、大臣の宣はく、「我この児に目をなむ見合はすまじき。親子の契りなれば、年経ては行き合ふ事ありとも、たちまちなむ見まじき。すみやかに乳母の家に率て

行きて置きたれ」とも、ただ出だしに出だし給へば、乳母、人の車を借りて、いと心ちあわてて、あさましと思ひて、物も取りあへずして、泣く泣く若君を具して出でぬ。道すがら乳母も泣く。若君も泣く事限りなし。

若君、乳母の家に行き着きて見れば、極めて荒れたる小家の狭きなり。慣らはぬ心ちに物おそろしく、心細くて過ぐる程に、夕暮方に心苦しげなる気色にて、かく独り言に、

⑤(心から荒れたる宿に旅寝して思ひもかけぬ物思ひこそすれ)

とうち詠めて居たるを見る乳母の心思ひやるべし。

(「今昔物語集」による)

#### 【注釈】

- ・○生良家子＝少しは家柄のよい子弟。
- ・○近きあたりの清め＝大臣のそば近くの掃除。
- ・○生手書く者＝多少は書道の心得がある者。
- ・○内におはす＝内裏にいらっしゃる。
- ・○上＝大臣の妻。
- ・○我が方＝自分の部屋。
- ・○微妙なれ＝不思議なくらいすばらしい。
- ・○護法＝仏法守護のために人に乗り移る神。
- ・○いつくしき＝ただならず美しい。
- ・○かははゆく覚えて＝良心がとがめ恥ずかしく思われて。
- ・○毫けゆく＝ただただぼうっとする。
- ・○いとうるはしく＝たいそうきれいに。
- ・○尊＝おまえ。あんた。
- ・○大臣、内に入りて＝大臣は妻のいる部屋に入って。
- ・○非常の者＝非常識な者。礼儀に欠ける者。
- ・○荒れたる＝荒れ果てた。

【問題】

問一 傍線部①「御厨子なる」の「なる」と同じ意味用法のものを、波線部ア～エの中から一つ選びなさい。

解答番号 [ 21 ]

- ① ア 硯の宮の下なる
- ② イ いかなる
- ③ ウ 若君なりけり
- ④ エ 草の葉の様になりて

問二 傍線部②「かく人なき隙に」とありますが、大臣家の人たちはどこで何をしていますか。その説明として、最も適当なものを一つ選びなさい。

解答番号 [ 22 ]

- ① 大臣の妻は姫君とともに内裏に参上して、婚礼の衣装について女房たちにあれこれと指示している。
- ② 大臣の妻は姫君とともに自らの部屋に戻って、硯の献上の仕方と女房の衣装について姫君と相談している。
- ③ ある女房は姫君に付き従って衣装の準備をし、ある女房は大臣の妻に付き従って局で作業をしている。
- ④ ある女房は大臣の妻に付き従ってその部屋へ行き、ある女房は大臣家の自らの局で姫君の入内の準備をしている。

問三 破線部 a「伝へ聞きつる」、b「いへ」、c「毫けゆく」の主語の組み合わせとして、最も適当なものを一つ選びなさい。

解答番号 [ 23 ]

|番号| a | b | c |

| ① | 生良家子の男 | 若君 | 若君 |

| ② | 生良家子の男 | 生良家子の男 | 生良家子の男 |

| ③ | 大臣 | 生良家子の男 | 若君 |

| ④ | 女房 | 若君 | 生良家子の男 |

問四 傍線部③「男これを聞くに、いかばかり覚えけむ、まことにうれしくかたじけなく覚えて」とありますが、男がこのように思った理由として最も適当なものを一つ選びなさい。

解答番号 [ 24 ]

- ① 若君から、硯を割ったことへの心の底からの謝罪の気持ちを大臣に告げておくと思われたから。
- ② 若君から、厨子より硯を取り出して割ったときの経緯をよくわかるように大臣に告げればよいと思われたから。
- ③ 若君から、若君自身が厨子より硯を取り出して割ってしまったと大臣に告げるよう教えられたから。
- ④ 若君から、硯を割ったことを知られたとしても掃除の仕事が続けられるよう大臣に頼んでおくと思われたから。

問五 傍線部④「大臣ともかくも宣はずして、男を『早う立ちね立ちね』と宣へば」とありますが、このときの大臣の気持ちを説明したものとして、最も適当なものを一つ選びなさい。

解答番号 [ 25 ]

- ① 硯を割ったのが若君だという返答を聞いて、怒りと悲しみが入り交じり、男を追い払ってまづは妻に自らの思いを告げたいという気持ち。
- ② 硯を割った責任を若君に転嫁しようとして、いい加減な話をする男に怒りが湧き、これ以上顔を見たくないという気持ち。
- ③ 硯を割ったのが男だと確信して強く叱責したものの、若君に対する疑いが強まったことで男には申し訳ないことをしたという気持ち。
- ④ 硯を割ったのは若君だと知り、すぐに妻に告げて若君を擁護する対策を講じなければならず、男にこれ以上関わりあっていられないという気持ち。

問六 傍線部⑤「心から荒れたる宿に旅寝して思ひもかけぬ物思ひこそすれ」の和歌の解釈として、最も適当なものを一つ選びなさい。

解答番号 [ 26 ]

- ① 自ら進んで荒れ果てた家に住む境遇を選んだことにより、思いがけず自分に注いでくれる父の大臣や母の愛情がよくわかったことだ。

② 自ら進んで荒れ果てた家に住む境遇を選んだことにより、思いがけず乳母の自分への愛情や掃除を担当していた男のつらい立場がわかったことだ。

③ 自らの心が引き起こしたことによって荒れ果てた家に住まねばならない境遇になり、思いがけず我ながら不安でつらい気持ちになったことだ。

④ 自らの心が引き起こしたことによって荒れ果てた家に住まねばならない乳母の境遇を知り、思いがけず乳母の自分に対する愛情がわかったことだ。

問七 この文章の登場人物の説明として、最も適当なものを一つ選びなさい。

解答番号 [ 27 ]

① 大臣は怒りっぽい性格で、硯が割れたことを知るや否や生良家子の男に迫って真相を聞き出し、男と若君と乳母を家から追放した。

② 生良家子の男は、最初に若君の部屋の掃除を担当したが、その後に大臣の部屋の掃除を担当し、厨子に納められていた硯を取り出して割ってしまった。

③ 乳母は、大臣の部屋から聞こえる若君を叱責する声と大臣の妻の泣く声から若君が硯を割ったことを感じ取り、大臣家の勤めを辞めて若君とともに実家に戻った。

④ 若君は、姿も美しく思いやりの心もあり、学識もすぐれた十三歳の少年で、生良家子の男を助けようと、割れた硯を厨子に納めてからその後の対処を教えた。

問八 『今昔物語集』と同じジャンルの作品として最も適当なものを一つ選びなさい。

解答番号 [ 28 ]

① 『無名草子』

② 『日本霊異記』

③ 『栄花物語』

④ 『太平記』

## 【解説】

### 問一：助動詞・助詞の判別

正解：①(ア)

- 本文の「なる」：「御厨子(名詞)＋なる＋硯(名詞)」という形だ。これは存在・所在の「なり」(～にある、～にいる)だ。
- 選択肢ア：「下(名詞)＋なる＋鍵」で、本文と全く同じ「存在」の用法だ。
- 他の選択肢：イは形容動詞の活用語尾、ウは断定の助動詞、エは動詞「成る」の一部。これらは頻出の引っ掛けだが、「名詞＋なる＋名詞」の形を見たらまず「存在」を疑うのが鉄則だ。

### 問二：読解・状況把握

正解：④

本文第1段落の中盤を確認しよう。「上(北の方)は我が方に渡りて……(中略)……女房どもも或はその供にあり、或はおのおの出で立ち急ぐとて、局局に居たり」とある。

- 「上」＝大臣の妻。
- 「局(つぼね)」＝女房たちの個室。

これらを正確に現代語訳しているのは④のみだ。

### 問三：主語の判定

正解：②

- a「伝へ聞きつる」：硯の素晴らしさを噂で聞いていたのは、掃除をしていた「男」だ。
- b「いへ」：「(私が壊したと言え)」と命じているのは、男を助けようとする「若君」……と思いきや、ここは選択肢をよく見てほしい。bは若君が男に対して放った言葉(命令形)であり、「(お前が)言え」という意味だ。つまり動作の主体は「男」になる。
- c「耄けゆく」：罪悪感でぼうっとしているのは「男」だ。

結果、すべて「男」が主語となる②が正解。主語判定は、文脈から「誰の動作か」を冷静に追うことが大切だ。

### 問四：内容一致

正解：③

傍線部③の直前、若君のアドバイスを確認しよう。「若君の、この硯を取り出でて見給ひつる程に、打ち破り給ひつ(若君がこの硯を取り出して見ていらっしゃるときに、お壊しになった)」と報告せよ、と教えている。つまり若君が罪をかぶるという内容だ。

#### 問五: 心情理解

正解: ①

大臣は、男から「若君が壊した」と聞き、激しいショックを受けている。直後の「ともかくも宣はず(何もおっしゃらず)」や、後の場面で「前世の敵なり(前世からの敵だ)」とまで言って泣き崩れる様子から、怒りと悲しみの深さが読み取れる。

#### 問六: 和歌の解釈

正解: ③

- ・「心から」: 自分の心(の決断)が原因で、という意味。
- ・「思ひもかけぬ物思ひ」: 予想もしていなかった(追放されるという)辛い思い。

若君は男を助けるために嘘をついたが、その結果、自分が路頭に迷うことになった。その自業自得(覚悟の上だが辛い)というニュアンスを掴んでいる③がベストだ。

#### 問七: 内容合致

正解: ④

消去法でいこう。

- ・①: 大臣は男を追放していない。
- ・②: 男が最初に若君の部屋を掃除したという記述はない。
- ・③: 乳母は自分の意思で辞めたのではなく、大臣に「連れて行け」と命じられて泣く泣く従っている。
- ・④: 本文第2段落冒頭の若君の描写と完全に一致する。

#### 問八: 文学史

正解: ②

『今昔物語集』は「説話集」だ。

- ①『無名草子』: 物語評論。
- ②『日本霊異記』: 説話集(日本最古の仏教説話集)。
- ③『栄花物語』: 歴史物語。
- ④『太平記』: 軍記物語。



## 【現代語訳】

そうこうしているうちに、その大臣の家に、少しは家柄もよく見栄えも悪くない若者が（掃除係として）仕えていた。大臣がこの男に「私の身の回りの掃除などをせよ」とおっしゃったので、毎朝掃除をしていたところ、この男は多少は書道のたしなみがある者で、（厨子の中にある）例の硯をどうしても見たいと思っていた。

折しも、大臣は内裏に参内しており、北の方（妻）は自分の部屋に移動して、姫君の婚礼衣装の準備について指示をしておこうということで、姫君と一緒にいらっしゃった。女房たちもある者はそのお供をし、ある者はそれぞれ外出の準備に急ぐと、自分の部屋にいた。（このように）人がいない隙に、この掃除をしていた男は、「たった今、こっそり開けてこの硯を見たとしても、誰が気づくだろうか、いや誰も気づくまい」と思って、硯の箱の下にある鍵を取って厨子を開け、この硯を取り出して見た。

すると、本当に人づてに聞いていた噂よりも言いようがないほど素晴らしかったので、すっかり気に入って、手のひらの上に乗せて差し上げたり下げたりして、しばらく眺めていた。その時、人の足音がしたので、急いで（元の場所に）置こうとしたところ、手元を滑らせて落としてしまった。硯は真っ二つに割れてしまった。

この男は本当に呆然として正気も失い、まるで護法善神がとりついた者のように震えて、目の前も暗くなり、心も動転して、目から涙を流して泣くことこの上ない。「大臣がこれを見て、どんなひどいことをおっしゃるだろうか、私自身はどうなってしまうのだろうか」と思ったことだろう、本当にどれほど心細く悲しく感じただろうか。

ところが、この足音をさせた人は、この邸の若君であった。その若君は、姿が美しく、心には慈悲があった。年齢は十三歳であった。今はもう元服してもよい頃だが、元服して剃り落としてしまうには惜しいほど（子供らしい）髪型が美しいので、今まで元服させずにいたのであった。少年ではあるが、生まれ持った才能も賢かった。さて、この男が硯を割ってしまい、正気を失って、ぼうっとして死人のような様子で座っているのを見て、若君は気の毒に思い、「これはどうしたのか」と問うたが、この男は泣いて答えることもできない。

若君はこれを極めて不憫に思い、この割れた硯を拾って元のように厨子に納めて鍵をかけた。その後、この男にこう言った。「お前、そんなにむやみに嘆くな。『若君が、この硯を取り出してご覧になっているうちに、お割りになってしまいました』と言いなさい」と教えた。（身代わりになると言ってくれた）これを聞いた男の気持ちはどれほどであったろうか、本当に嬉しく、もったいなく思われて、這うようにしてその場を去った。

そうは言っても、男は（嘘をつかせたことが）ひどく心苦しく、恥ずかしく思われて、このことを誰にも言わずにただぼうっとしているうちに、大臣が内裏からお帰りになって、「（入内の準備のために）品々を取り出そう」と言って、厨子を開けてご覧になると、この硯が袋から取り出されており、見事に真っ二つに割れていた。

これを見た大臣は目の前が真っ暗になり、驚きあきれて正気を失われた。しばらく気持ちを落ち着かせて女房たちにお尋ねになると、みな「知らない」と申し上げる。「いつものお掃除の方が参っていた時分です」と（女房が）申し上げるので、この男を呼び出して、「この硯が割れているのはどういうことだ。お前は知っているのか」とお尋ねになると、男は顔色も草の葉のように青ざめて、袖を合わせ、うつむいて控えている。

大臣は極めて怒りっぽい人だったので、目をいからせて、「お前、はっきり申せ、申せ」と責め立てられると、男は震えながら、消え入りそうな声で「若君が……」とばかり二声ほど申し上げた。大臣が「なぜだ、どうしたのだ」と声を高くして責められるので、「(若君が)取り出してご覧になっているうちに、手元を滑らせてお割りになってしまいましたので……」と申し上げた。すると、大臣はそれ以上何もおっしゃらず、男を「早く下がれ、下がれ」とおっしゃったので、男は這うようにして去っていった。

大臣は奥の部屋に入り、北の方にこうおっしゃった。「この硯は、あの子が割ったのだ。あの子はわが子ではなく、前世の敵であったのだ。このような非常識な者を、私は長年愛おしく思って育ててきたことか」と言って、声を放って泣きなさる。北の方はこれを聞いて泣きなさる。女房たちも不吉に思えるほど一緒に泣いていた。若君の乳母の嘆きは言いようがない。

少し時間が経って、大臣がおっしゃるには、「私はもう、あの子とは顔を合わせるつもりはない。親子の縁であれば、年月を経て会うことはあっても、今はすぐには会いたくない。速やかに乳母の家へ連れて行って置いておけ」と、ひたすら追い出しなさるので、乳母は人の車を借りて、非常に心も動転し、驚きあきれて、荷物も満足に持たず、泣く泣く若君を連れて出て行った。道中、乳母も泣き、若君も泣くこと限りない。

若君が乳母の家に着いて見ると、(そこは)極めて荒れ果てた小さな家で、狭い所であった。慣れない環境で薄気味悪く、心細く過ごすうちに、夕暮れ方に切ない様子で、このように独り言として、

「(自分の心から出た嘘のせいで)荒れ果てた宿で旅寝をして、思いもかけない辛い思いをすることだ」

と詠んで座っているのを見る乳母の気持ちは、推し量るべき(察するに余りある)ものである。

【練習問題】

第一部:重要古語

問1:「いとほし」の、この文脈(気の毒な場面)での意味を答えよ。

問2:「あさまし」の根本的な意味を答えよ。

問3:「うるはし」の意味を答えよ。

第二部:文法・識別

問4: 次の「なる」の文法的意味を答えよ。

「門のほとりなる男」

問6: 和歌で使われる「心から」というフレーズの一般的な意味を答えよ。

問8:『今昔物語集』のジャンルと、収録されている話の範囲(三国の名称)を答えよ。

## 【練習問題の解説】

### 第一部：重要古語

問1：気の毒だ。不憫だ。

- ・（解説）現代語の「愛おしい（かわいい）」に引きずられないこと。相手に同情するニュアンスが基本だ。

問2：意外なことに驚きあきれる。

- ・（解説）予想外の事態に直面して、呆然とするようなマイナスの驚きを指す。

問3：端正だ。整っている。立派だ。

- ・（解説）「美しい」という訳でも通じるが、形が整っていて「きちんとしている」というニュアンスを掴んでおくと、記述や選択肢で有利になる。

### 第二部：文法・識別

問4：存在（～にある、～にいる）

- ・（解説）「場所（名詞）＋なる＋名詞」の形。場所を説明している場合は「断定」ではなく「存在」だ。

問6：自分の心（のせい）で。自分から進んで。

- ・（解説）他人のせいではなく、自分の意志や行動が原因であることを表す。和歌のテーマ（自業自得、覚悟など）を読み解くカギになる。

### 第三部：読解・文学史

問8：ジャンル：説話集 ／ 範囲：天竺（インド）・震旦（中国）・本朝（日本）

- ・（解説）この「三国（さんごく）」の構成は文学史の必須知識だ。あわせて『宇治拾遺物語』も説話集であることを覚えておこう。